

宇春在京信寄る一書

初よりとあり月日の都人白月

三井六丁丁書

花月よ我らも花月の花

とち宮道中 白月

不折柄の巻をきて

わきま 花月柄の下紅葉

白子浦よ松坂、舟を

伊概あよ舟たり月之夜舟哉

松坂より真行を

月十日

浦の名に月よらるる諸か

まの道なるかたるる花月

還ら月かつらひの物か

鶉の鳴くころの書宛みけ

花野にせに路庭の秋



宇春在京信若く一會
 初より五月の都人
 三井小寺無行
 宿風我らも也松の号
 不所病のをも々々
 万葉の花抄の下の茶
 白子浦よ松の舟を
 伊勢よ五月の夜舟
 松は三月無行
 一月十五日
 浦の舟月よる満か
 才の道にふれるを
 遠山向かへるを
 船の鳴りしるを
 花野にふりしるを



